107 誌上発表　西鶴作品にみる身体に関する語（一）

計良　吉則
順天堂大学医学部医史学研究室

『好色一代男』は西鶴の処女作で，発刊は1682（天和2）年，8巻8冊からなり，板本は地元の大坂板5種と江戸板3種さらに絵本2種がある．大坂板の挿絵は蒔絵師源三郎あるいは西鶴自筆，江戸板は菱川師宣とされている．

本作品における主人公（世之介）は，世間の常識や倫理にとらわれず，好色で自由気ままな人生を楽しむ．「浮世」に生まれて生きた主人公を通して，当時の庶民男性が一種のあこがれとするような生き方を描きだしたこの作品は，読者の心をとらえ人気を博した．つまり当時の庶民向けの読み物の中では，際立って人情や風俗を興味深く描き，読者に強く訴える娯楽性を有していた．そのため本作品を系統とする小説類を「浮世草子」と呼び，それ以前の「仮名草子」と区別している．

本作品の中の身体に関する語に着目し，それについて調査することは，当時の人びとの身体観を知るうえで意味のあることと考えた．

まず，全身を表すものの中では「身」という語が圧倒的に多く，100か所を超えていた．「身は酒にひたし」「我が身」「風にまかする身」「身もだえして」「身をおもふ」のように用いられている．また「膚」もみられ，「はだへみる人」「しろきはだへ」のように用いられている．

次に，頭部においては「顔」が最も多く，約40か所あり，「おどろく顔」「顔見て」「笑ひ顔して」のように用いられている．また「頭」は「あたまを隠し」「あたまがいたい」のように用いられ，「頚」は「首すじ」「首くくりて」のように用いられている．

躯幹では「腹」と「腰」が多く，それぞれ約20か所以上みられた．「腹よりうまれて」「御脇ばら」「腹かかえて」や「腰を懸けながら」「腰つき」「腰をかがめ」のように用いられている．また「胸」は「胸つかへて」，「脇」は「左右の脇の下うるほひ」のように用いられている．

四肢の中では「手・指」が極めて多く，100か所を超えていた．「手づから」「手に懸けさすも」「手を合せて」「左の御手に」「指さして」のように用いられている．また「足・脚」も比較的多く，約30か所みられた．「足には革踏（たび）はかせ」「足もと」のように用いられている．

五孔では「眼・目」が最も多く，約60か所にみられた．「目つき」「目にかかれば」「目の前」「人の目に立たぬ」のように用いられている．次に「口」が多く，30か所以上みられ，「口びる」「口をあかせず」のように用いられ，また「耳」「鼻」は「耳をふさぎ」「鼻すじ」のように用いられている．

分泌物では「涙・泪」が多く，約30か所みられ，「泪にくれて」「泪まじりの」のように用いられている．また「汗」は「汗水になして」のように用いられていた．

排泄物では「息」が多く，10か所以上でみられ，「息はきれ」「息をとめ」のように用いられている．

全体としては少数（10か所未満）ではあるが，「骨」「尻」「爪」があり，「骨をりて」や「尻からげ」，「爪をはなち」などがみられた．特に「爪」は「心中立て」に伴うものとしての用例がある．「心中立て」とは当時女郎が馴染み客に真心を示す手段で，爪をはがしたり，髪を切ったり，指を切ったりして相手に贈る習慣である．

また当時，腎臓は生殖器官とみなされていたため，「腎水」が精液の意味で用いられ，「腎虚」は性行為過度による衰弱の意味で用いられている．男性の外性器を表すものに「いな所」「ろてん（露転）」「作蔵」「かり首」などがあった．そして妊娠は「お中にやうす」「お中をかしく」「腹むつかしく」などが用いられている．堕胎薬は「子おろし薬」で，「いのこずち（牛膝）」「水銀（みづがね）」「綿実（わたざね）」「唐がらしの粉」がそれに相当するものとして記載されている．